

〈研究主題〉

自立し社会参加する資質・能力を養う自立活動の実践 ～「自己の理解の深化」と「自己の変容の自覚化」に着目した指導を通して～

西之表市立榕城小学校 教諭 御領原 尚弘

目次

1	はじめに	2
2	研究テーマについて	2
3	研究の構想について	4
	(1) 研究の仮説	
	(2) 研究の内容	
4	研究の実際	5
	(1) 自己の理解を深める指導の工夫	
	ア 着目した自立活動の内容	
	イ 感覚や認知の特性に着目した指導	
	ウ 自立活動の指導の実際	
	(ア) 単元「自分けんきゅう～感覚に注目して、自分を知ろう～」	
	(イ) 指導計画	
	(2) 自己の変容の自覚化に着目した指導改善	
	ア 自己の学びを可視化するための手立ての工夫	
	イ 振り返りの工夫	
5	研究の成果と課題	9
	(1) 研究の成果	
	(2) 研究の課題	
6	おわりに	10

【引用・参考文献】

- 「小学校学習指導要領解説 総則編」 文部科学省 (2018)
- 「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編 (幼稚園・小学部・中学部)」 文部科学省 (2018)
- 「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚園・小学部・中学部)」 文部科学省 (2018)
- 「事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー『合理的配慮』の時代をたくましく生きるための理論と実践」 片岡美華, 小島道生編著 金子書房 (2017)
- 「発達が気になる子の感覚統合」 木村順 学研教育みらい (2014)
- 「学習評価の在り方ハンドブック」 国立教育政策研究所 (2019)
- 「自立活動学習内容要素表」 長崎自立活動研究会 (2019)
- 「自立活動の理念と実践 [改訂版]」 古川勝也, 一木薫編著 ジアース教育新社 (2020)

1 はじめに

現代社会は、Society5.0 が到来し、グローバル化の進展や人口知能(AI)の飛躍的な進化、技術革新など社会全体が急激に変化している。また、学校現場においても新型コロナウイルス感染症の感染拡大や社会のデジタル化・オンライン化への対応など、予測困難な時代に柔軟に対応し、子供一人一人の学びを保障していくことが求められている。

このような社会的背景を受け、中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(2021)において、子供たちが多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる資質・能力を高めていくために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進していく重要性が提言された。また、このような学びの実現を通して、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない教育活動を推進していくが求められている。

これらの社会的背景や中央教育審議会答申等を踏まえると、これからの未来を生きる子供たちは、「多様な人々」との関わりの中で共に生きていくことが更に重要になってくるといえる。このことについては、「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(報告)」(2021)の取りまとめにも述べられているように、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築を目指し、特別支援教育の充実を更に図っていくことが必要不可欠である。

そこで、現在、担任をしている知的障害特別支援学級における子供たちの実態を踏まえ、自立活動の指導の工夫や指導改善に着目することにした。自立活動の実践を通し、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、「自立し社会参加する資質・能力」を高めていくことが、これからの共生社会に更に主体的に参加し、豊かな人生を切り拓いていく子供の姿へとつながっていくと考え、研究を進めていくことにした。

2 研究テーマについて

本学級5名の子供を対象に年度当初に、子供たちが自己の特性について考える場面を設定するという側面と、教師が子供たちの実態を把握するという側面から、自立活動「自己分析シート『自分を知ろう』」(以下、自己分析シート)という学習において、自己の得意・不得意や頑張っていることについて考え、考えたことをまとめる活動を設定した。

また、学級全体の实態を把握するために、学習支援ツール(Google フォーム)を活用し、自己分析シートへの取組状況について子供たちへアンケートを実施した。その結果を集約すると以下のような結果になった(図1)。

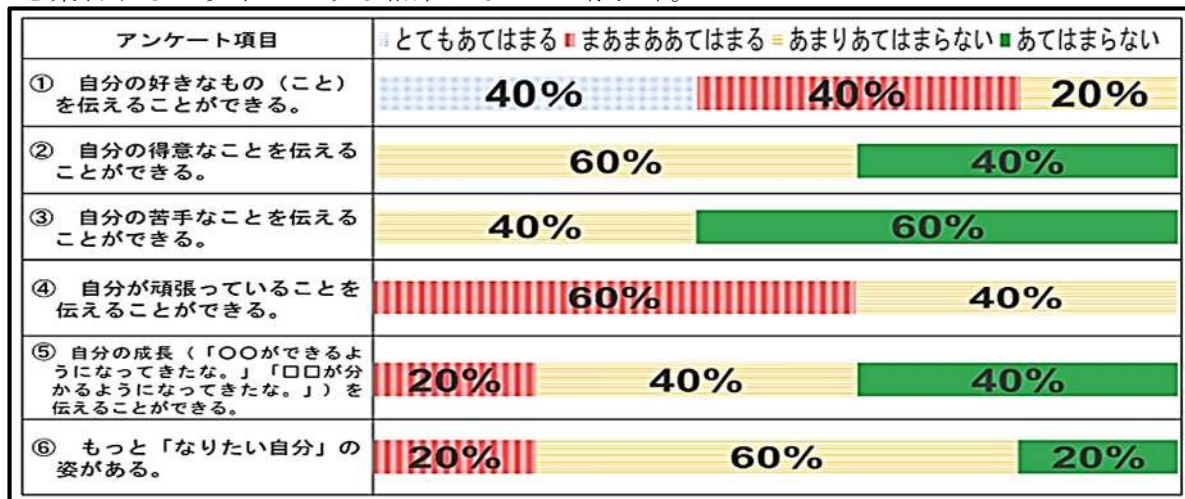


図1 自己分析シートの取組状況についてのアンケート結果(学級全体)

子供たちが自己分析シートに取り組む際は、教師と対話をしながら取り組んだり、個別にアンケート結果をレーダーチャートにして可視化したりすることで、自分の考えを記述することが難しい子供も自分の考えを表出することができるようにした。その中で、子供たちからは、次のような意見が出た（図2）。

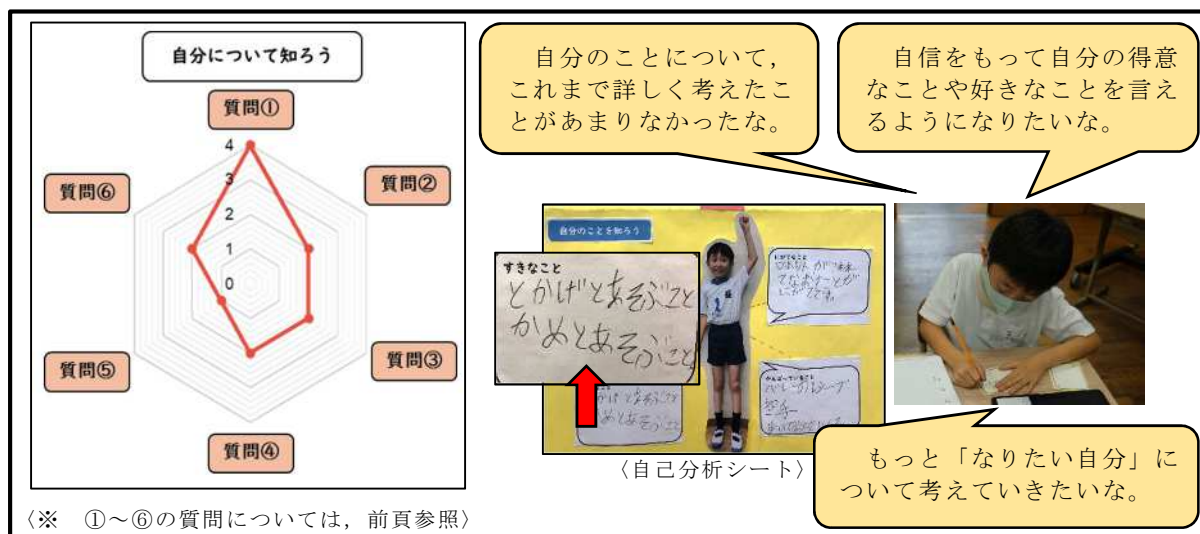


図2 「自分を知ろう」レーダーチャートの結果（個人）と子供たちから出た意見

これらのことから、本学級の子供は、これまで自己の得意・不得意や特性、将来の姿などについて考え、自己の理解を深めるような学習の経験が十分ではなかったということが明らかになった。また、そのような学習経験の少なさが、自己の特性を肯定的に捉えたり、自己の変容や成長を自覚したりすることの困難さの要因の一つになっているという実態も明らかになった。

その一方で、子供たちには、「もっと自分について知りたい。」「『なりたい自分』の姿に近づきたい。」という思いや願いが芽生えてきていることが分かった。このことから、子供たち自らが自己の理解を深めることや、自己の変容や成長を自覚することに着目し、自立活動の指導の工夫や指導改善を図っていく必要性を見いだすことができた。

このような子供の実態と先に述べた社会の要請等を踏まえ、次のような研究テーマを設定した。

【研究テーマ】

自立し社会参加する資質・能力を養う自立活動の実践

～「自己の理解の深化」と「自己の変容の自覚化」に着目した指導を通して～

【研究テーマの捉え】

「自立し社会参加する資質・能力」とは

子供一人一人が、それぞれの障害の状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすること。

社会、経済、スポーツ文化などの分野の活動に参加することができるようになること。

「自己の理解を深める（深化）」とは

自己の特性（得意・不得意や行動の特徴、感覚や認知の偏り等）について考え、自己を知る視点を増やし、その特性が学習や生活に与える影響を理解すること。

「自己の変容を自覚する（自覚化）」とは

「なりたい自分」の姿に対する思いや願いをもち、自分自身ができるようになってきた姿や、分かるようになってきた姿に気付くこと。

3 研究の構想について

(1) 研究の仮説

【研究の仮説Ⅰ】

子供たちが自己の特性について考える学習を充実することで、自己の理解を深めることができるのではないか。

【研究の仮説Ⅱ】

学習状況を可視化したり，振り返りの手立てを工夫したりすることで，子供たちは，自己の変容や成長を自覚することができるのではないか。

(2) 研究の内容

前述した二つの仮説について研究・検証していくために，以下の研究内容を設定し，研究の構想を立てた（図3）。

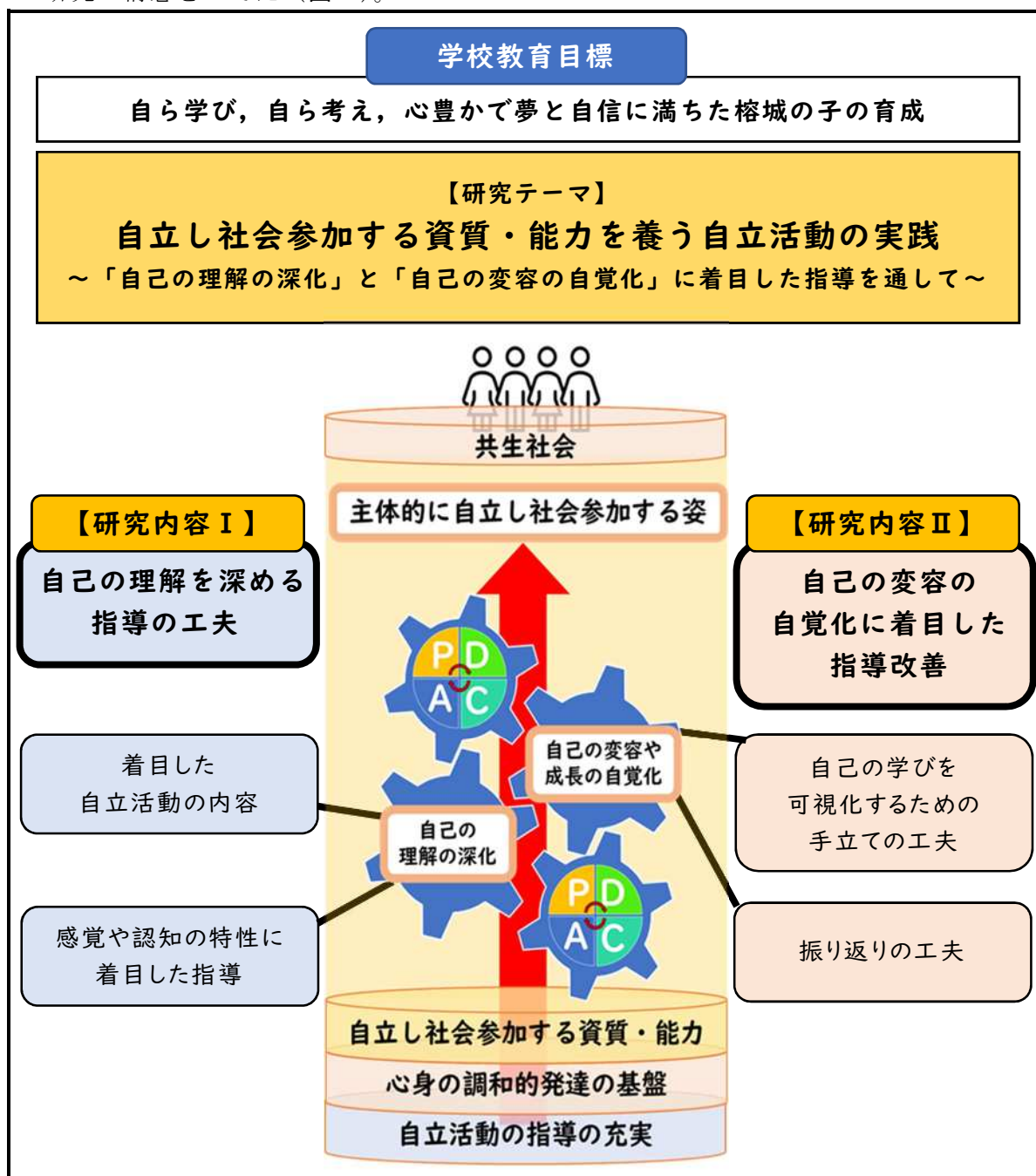


図3 研究の構想（イメージ図）

4 研究の実際

(1) 自己の理解を深める指導の工夫

ア 着目した自立活動の内容

従前の特別支援学校教育要領・学習指導要領には自立活動の内容として六つの区分（「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「身体の動き」、「コミュニケーション」）について26項目の内容が示されていたが、平成29年の改訂で、自己の理解を深め主体的に学ぶ意欲を一層伸長し、発達の段階を踏まえた指導を充実するために、次のように項目が見直された。

【追加された項目】

「1 健康の保持」(4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。

【改められた項目】

「4 環境の把握」(2)感覚や認知の特性への対応に関すること。（従前）

→(2)感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。（現行）

「4 環境の把握」(4)感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。（従前）

→(4)感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること。（現行）

自立活動の指導においては、「全ての項目を取り扱うのではなく、個々の児童の実態に応じて必要な項目を選定し、それらを相互に関連付け、指導目標や具体的な指導内容を設定するという事に留意しなければならない」とされている。

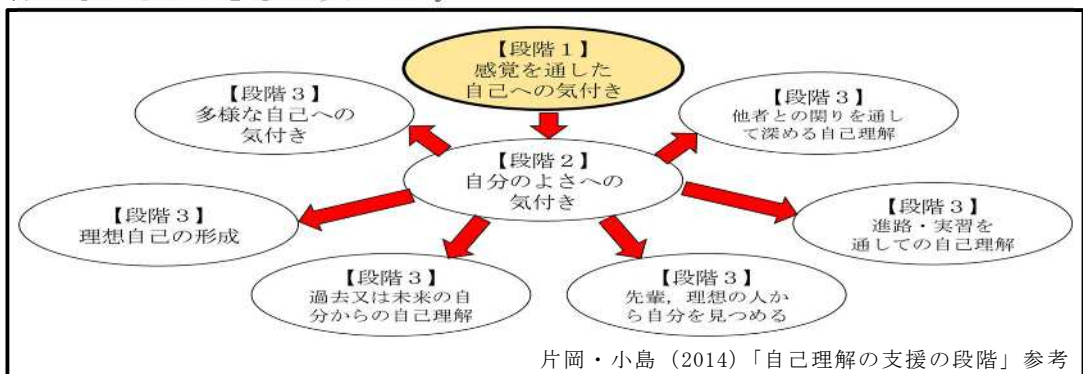
自立活動の個別の指導計画を作成し、個々の障害の状態や程度に応じたきめ細やかな指導を行っていくために、現行の学習指導要領において見直された上記の項目に着目することに意義があると考えた。子供たちの実態を的確に把握し、個々に応じた指導目標と指導内容を設定していくために、上記の項目とその他の項目との関連を図りながら、自立活動の授業を構想していくことにした。

イ 感覚や認知の特性に着目した指導

(7) 自己理解の支援の段階を意識した指導

前述した「障害の特性の理解」や「感覚や認知の特性についての理解」を深めていくことは、自己の障害にどのような特性があるのか理解し、それらが及ぼす学習上又は生活上の困難についての理解を深め、その状況に応じて、自己の行動や感情を調整したり、他者に対して主体的に働き掛けたりして、より学習や生活をしやすい環境にしていくために重要であると考えた。

片岡・小島（2014）は、自己理解の支援の段階として、下の図4のように三つの段階を示した。それを参考に、本研究においては、段階1の「感覚を通じた自己への気づき」に着目し、指導内容の工夫を図ることで、段階的に自己の理解を深めることができるようにした。



片岡・小島（2014）「自己理解の支援の段階」参考

図4 本研究で着目した自己理解の支援の段階

(イ) 単元の構想

感覚を通じた自己への気付きを促し、子供たちが自己の理解を深めることができるように、感覚（視覚や聴覚、触覚、嗅覚、固有覚、前庭覚など）や認知（記憶する、思考する、判断する、決定する、推理する、イメージを形成するなどの心理的な活動）の特性に関わる活動として、大きく四つの活動（「見る」、「聴く」、「バランスを取る」、「（身体の動きを）イメージする」）を取り入れた単元を構想し、実践することにした。

単元を構想する際は、「感覚統合理論（Ayres. A. J）」を参考に固有覚や前庭覚の働きに着目し、自分の身体に対する意識や概念（ボディーイメージ）を育むことで、個々の実態に応じた指導を展開することができるようにした。

自立活動の指導計画は、個別に作成されることが基本であり、最初から集団で指導することを前提とするものではないことから個別の形態で行われることも多いが、指導目標を達成する上で、集団を構成することが効果的であると考え、個別に行う指導と集団で行う指導を組み合わせながら、指導の単元化を図るようにした。

ウ 自立活動の指導の実際

(ア) 単元「自分けんきゅう～感覚に注目して、自分を知ろう～」

(イ) 指導計画(総時数7時間)

過程	主な学習活動	時間	形態
導入	1 本単元の学習内容を知り、学習計画表を基に単元の見通しをもつ。	1	集団
	<p>個に応じた指導を充実させる視点から、集団を構成することが効果的な学習場面と、個別に指導する学習場面を意図的に組み合わせ、単元化を図った。</p>  <p>集団で実施した自立活動の様子</p>		
展開	<p>2 感覚や認知に関わる活動（「のびるのわざ『見る』、『聴く』」）に取り組むことを通して自己の得意・不得意について考え、考えたことや気付いたことを自己評価し、自己評価したことをポートフォリオ化する。</p> <p>「とてもできた」「できた」「あまりできなかった」の三段階で活動について自己評価を実施。</p>  <p>「見て見てゲーム(場所と色を対応させてシールを貼る活動)」の様子</p>	2	個別

まず、何も見ずに複数の単語を聴いて、覚える。その後、ワークシートに示された絵の中から、聴いて覚えた単語を選び丸で囲む。



「聴く聴くゲーム」の様子

3 感覚統合に関わる活動（「のびるのわざ『バランスを取る』、『イメージする』」）に取り組むことを通して自己の得意・不得意について考え、考えたことや気付いたことを自己評価し、ポートフォリオ化する。

2 個別



「バランスを取る」活動の様子



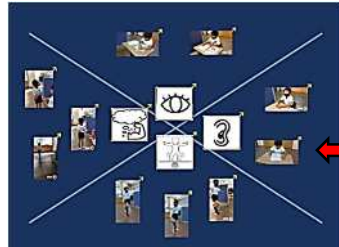
「イメージする」活動の様子

「バランスを取る」、「(身体の動きを) イメージする」といった活動を充実させることで、自己の感覚の敏感さや偏りなどに気付く経験を通して、自己の理解を深めることができるようにした。

展開

4 これまでの学習を振り返り、自己の感覚や認知の特性に着目することで、これまでの学習を通じた自己の変容や成長について考える。

1 集団



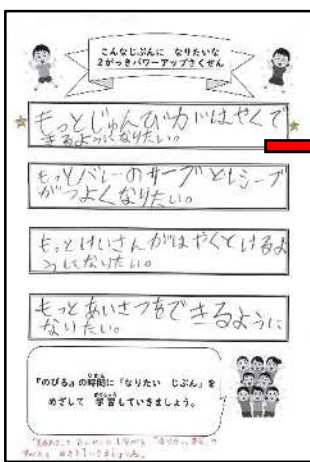
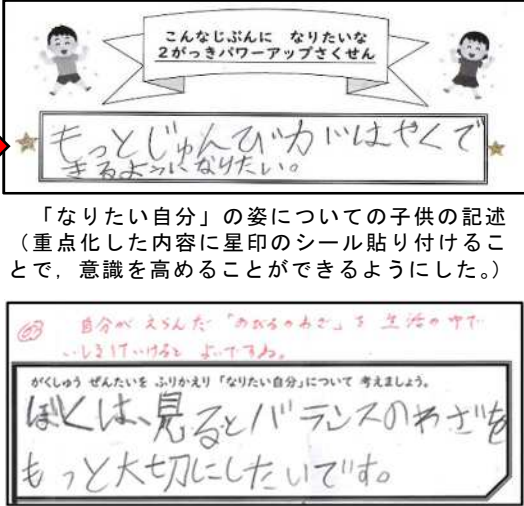
ICTを活用し、自分の学習状況を振り返る様子

学習支援ツール（ロイロノート・スクール）を活用し、蓄積された写真や動画を見て自分の活動を振り返ることで、四つの活動（「見る」、「聴く」、「バランスを取る」、「(身体の動きを) イメージする」）を比較しながら、自己の特性について考えることができるようにした。

一単位時間ごとに個人目標を設定することで、個々の子供に応じた指導と評価ができるようにした。

A (2年)	教師と一緒に感覚や認知に関わる活動を振り返り、自分の感覚や認知の特性に興味・関心をもち、考えたことを他者に伝えることができる。
B (2年)	教師と一緒に感覚や認知に関わる活動を振り返り、自分の感覚や認知の特性に興味・関心をもち、更に行きたいことを考えることができる。
C (4年)	感覚や認知に関わる活動を振り返り、自分の感覚や認知の特性についての興味・関心を高め、自分の得意・不得意や「なりたい自分」の姿について考えることができる。
D (4年)	感覚や認知に関わる活動を振り返り、自分の感覚や認知の特性についての興味・関心を高め、自分の得意・不得意や「なりたい自分」の姿について考えることができる。
E (5年)	教師と一緒に感覚や認知に関わる活動を振り返り、自分の感覚や認知の特性に興味・関心をもち、考えたことを他者に伝えることができる。

一単位時間の個人目標（指導計画 6 / 7 時間目の場合）

終末	<p>5 単元全体を振り返り、「なりたい自分」の姿を目指し、重点化して取り組んでいくことを自己選択・自己決定する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;">  <p>『なりたい自分』について考えよう ワークシート</p> </div> <div style="width: 45%;">  <p>「なりたい自分」の姿についての子供の記述 (重点化した内容に星印のシール貼り付けることで、意識を高めることができるようにした。)</p> <p>単元全体を通した子供の振り返り</p> </div> </div>	1 個別
<p>「なりたい自分」の姿については、単元の学習と関連付けながら自己選択・自己決定する場面を設定することで、特に「なりたい自分」の姿を明確にすることができるようにした。</p>		

(2) 自己の変容の自覚化に着目した指導改善

ア 自己の学びを可視化するための手立ての工夫

子供たちが自己の変容や成長を自覚するためには、一つ一つの学びを連続的に捉え、見通しをもって学習したり、自己の学習状況を適宜、振り返ったりすることが重要であると考えた。これまでの自立活動の実践では、一単位時間のワークシートを作成し、活用を図ってきたが、学習のあしあとを残す手立てが十分ではなく、子供たちが学びを連続的に捉えることが難しかった。そこで、指導改善として、学びを可視化することに取り組んだ。

具体的には、単元全体の学びの歩み「マウンテンマップ」(図5)を教室内に掲示したり、一枚ポートフォリオ形式の振り返りシート(図6)を作成したりすることで、単元全体の学びの歩みを一目で確認することができるようにした。子供たちが一単位時間ごとの学びのつながりを意識することができるようにすることで、自己の変容や成長に気付くことができるようにした。



図5 掲示した学びの歩み「マウンテンマップ」

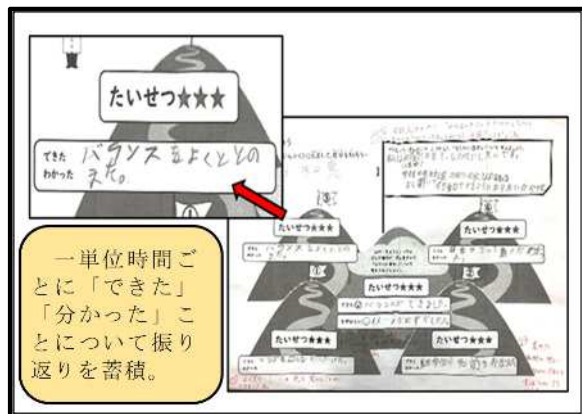


図6 一枚ポートフォリオ形式の振り返り

イ 振り返りの工夫

自己の変容や成長の自覚化に着目し、指導改善の視点から一枚ポートフォリオ形式の振り返りシートの活用を図ったが、その一方でワークシートに自分の考えを記述することに難しさを感じる子供の姿も見られた。そこで、子供の実態に応じて一枚ポートフォリオ形式の振り返りシートと併用しながら、ICTを効果的に活用した振り返りの工夫を図ることとした。

毎時間の導入と終末の振り返りの場面では、自己評価の視点として三段階のルーブリック表を提示し(図7)、子供たちが振り返りの視点を意識しながら学習することで、一単位時間の学習を通じた自己の変容や成長を自覚することができるようになった。また、学習支援ツール(ロイロノート・スクール)を活用し、子供の振り返りをデジタル化して蓄積することができるようになった(図8)。子供の実態に応じて振り返りシートを工夫することで、ローマ字入力ができる子供は、自分の考えを文字入力して、振り返りを残すようにし、文字入力が難しい子供は、タブレット端末上で記号(星印)を動かし、自分なりに学習を振り返ることができるようにした(図9)。

このような振り返りを継続しながら、本時のねらいに沿った振り返りを蓄積していくことで、単元を通じた自己の変容や成長を自覚することができるようになった。



図7 振り返りの視点

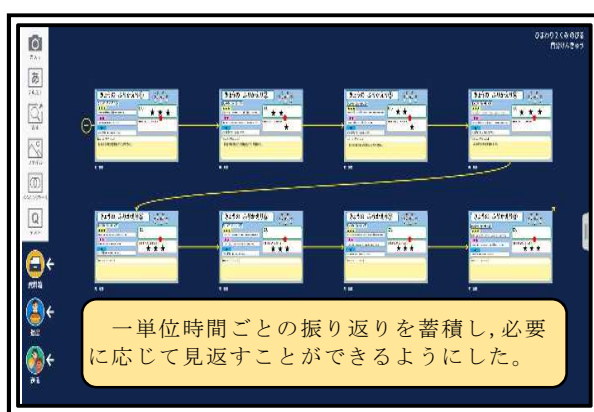


図8 デジタル化した振り返りシート

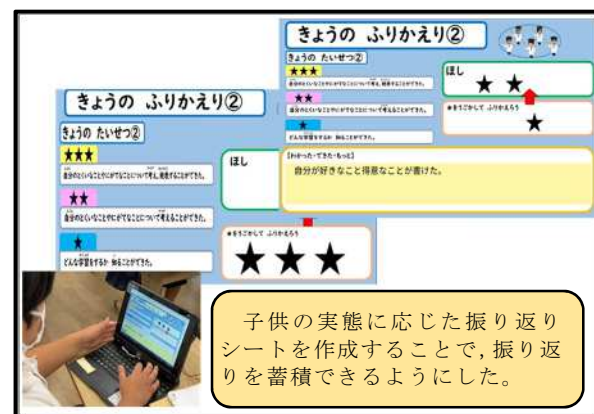


図9 子供の実態に応じた振り返りシート

5 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本研究における授業実践後に、年度当初と同じ内容について学級全体を対象にアンケートを実施し、アンケートの結果を比較すると次のようになった(図10)。年度当初と比べ、自己を知るための視点を増やし、自己の特性が学習や生活に与える影響を考える学習を経験したことで、自己を肯定的に捉え、自己の得意・不得意や、頑張っていることを自信をもって他者に伝えたり、お互いのよさや違いをこれまで以上に認め合ったりする姿が多く見られるようになった。

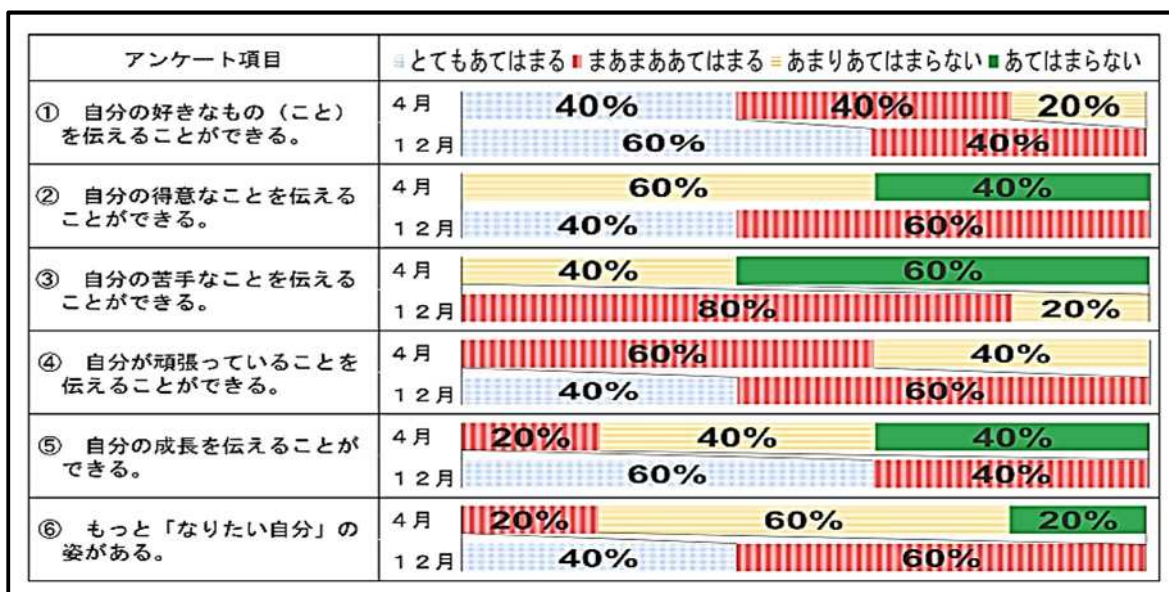


図 10 本研究における授業実践後のアンケートの結果（4月と12月の比較）

また、アンケート項目⑤⑥の結果に表れるように、自己の変容や成長に気付く場面が増え、「なりたい自分」の姿に対する思いや願いをこれまで以上にもつことができるようになったことも本研究の成果であった。子供たち一人一人が、学校生活や家庭生活において、「なりたい自分」の姿を思い描き、主体的によりよい自分の姿を目指すことができるようになった。

(2) 研究の課題

子供たちが自己の理解を深めていく段階として、本研究においては、感覚や認知の特性に着目したが、子供たちが更に自己の理解を深めていくためには、他者との関りに着目した学習を通して、多様な自己への気付きを促していかなければならない。そのために、個々の子供の実態をよりの確に把握し、自立活動の「人間関係の形成」や「コミュニケーション」の内容との関連から、より系統的な指導の充実を目指していくことが必要である。

また、自立活動の指導において、一単元だけでなく、単元をつなぐことで、中・長期的な学習の中で、子供が自己の変容や成長を自覚することができるような単元構想の工夫を更に図っていくことが必要である。

6 おわりに

本研究を通して、着目した「自己の理解を深める」、「自己の変容を自覚する」ということは、子供たちが変化の激しい社会で自立し、社会参加する上で、非常に重要であると考えられる。時代の変化や困難さを前向きに受け止め、自分なりの方法で対応したり、困難さを軽減するための支援を自己選択・自己決定したり、自分に合った支援を周囲に求めたりする際にもこれらのことが必要である。また、合理的配慮の提供は、当事者からの「意思の表明」が必要であることから、そのために自己を理解することが必要不可欠であると考えられる。

「自己の理解を深める」、「自己の変容を自覚する」ことは、短期間で養われるものではなく、継続的な指導を通して養われていくものであると考える。そのために、保護者や医療、福祉等の関係機関と連携を図りながら一貫した指導を目指し、今後も更に子供たちが主体的に自立し社会参加する資質・能力を高めることができるように研究を深めていきたい。